「老人にやさしい麻酔」をめざして

この度は第6回老年麻酔研究会を老人医療センターの麻酔科で主催させていただくことになりました。高齢化時代の到来と共に高齢者に対する手術が近年増加しております。けれど多くの施設で、「老人？それは成人とどこが違うのだろうか」と試行錯誤で麻酔をかけておられるのが現状と思われます。老化による生理学的変化とそれに基因する疾患を把握し、そこに作用する麻酔薬の影響を考えた時に初めて安全な高齢者麻酔を追及出来るものと考えます。

今回の老年麻酔研究会は高齢者麻酔の基礎を踏まえて実際の問題を考えたいと思います。神経と循環をとりあげ特別講演とシンポジウムを中心にプログラムを組んでおります。特別講演は佐藤昭夫先生の神経系の加齢変化と、小澤利男先生の老年者の循環器疾患となっております。佐藤先生、小澤先生とも私達が日頃ご指導いただいている先生方ですが、それぞれ基礎老年医学会、老年医学会の中心的存在となっておられる先生方です。今回は「麻酔にとらわれず高齢者を扱う全ての医者が知っていなくてはならない基本的なお話を」とお願いしてございますが、そのお話は明日の高齢者麻酔の基礎として必ず役にたつものと思われます。

シンポジウムでも特別講演に合わせて脊椎麻酔と不整脈を取り上げました。脊椎麻酔は高齢者麻酔の中で現在最も討議されている麻酔方法と考えられます。今回座長の小川節郎先生のご要望で高齢者の脊椎麻酔に関する全国アンケートを実施しました。この結果を含めたシンポジストとの討論のなかから高齢者の脊椎麻酔に関する一つの答えを出していただけるのではないかと期待しております。
高齢者不整脈のシンポジストは全員循環器内科の先生方です。各先生方から高齢者の不整脈について深いお話を伺えることと思います。麻酔科からは座長の稲田英一先生お一人ですが、循環器科の先生方との討論の中から、高齢者の周術期に見られる不整脈に対する的確な対応を引き出していただけるものと楽しみにいたしております。

今ここに全ての抄録を目にしてその充実した内容に、今回の研究会が私自身にとっても非常に有意義な一日になりそうな予感で胸をときめかしております。シンポジウムのみならず特別講演にあっても演者の先生方は会場からの質問を期待されていると思います。科の壁を超えて老化による変化と疾患、さらには麻酔管理に関して論議し得た時、初めて安全な麻酔が可能となります。活発な質問・討論を期待いたしております。

今回の研究会は少人数の麻酔科での手作りの研究会です。行き届きません事が多々あることと思われますがお許しいただけますようお願いいたします。

第6回老年麻酔研究会

会長　目黒和子

ごあいさつ

老年麻酔研究会も第７回目を迎える事になりました。小児麻酔研究会があって、老年麻酔研究会がないのはおかしいとの事で発足したと聞いていますが、高齢化時代を迎え当然の事でありましょう。高齢者では各種臓器の機能が年齢と共に下降することは良くわかっておりますが、麻酔中にどの位点滴で水分を与えてよいかはっきりわかっていません。今年は一般演題が12題集りました。日本ペインクリニック学会は毎年2,000人近く集ると聞いていますが、今から約25年前ペインクリニック研究会として発足した時は、10名位の集りであったと記憶しています。この老年麻酔研究会も20年もしたら盛況な学会になっている事と思います。

免疫力の落ちた高齢者に麻酔・手術が加わることなので、広川教授に「ストレスと免疫と老化」という題で講演をお願い致しました。又アレルギーで世界的に有名な獨協医大の牧野教授に喘息の事について講演をお願い致しました。喘息の事はある程度麻酔の先生方も御存知なので、最近の事についてトピックスという型でお願い致します。

今年から老年麻酔研究会も全国的レベルに広げて行うようになりましたので、多数の御参加を御願い致します。

平成 6 年 12月

第７回老年麻酔研究会

会 長　**緒方博丸**

ご挨拶

第8回老年麻酔研究会の開催にあたって一言ご挨拶申し上げます。高齢者社会といわれる社会に突入して、いやおうなしに医療の分野でもこの現状に対応せざるをえなくなりました。老人の手術では手術手技、関連技術の進歩と共に麻酔の進歩は手術適応の拡大、手術成績の向上に欠くことのできない要素であります。この研究会は同好会の形でスタートしたこじんまりしたものでありましたが、時代のニードにあわせて参加者も増え、次第に研究会としての形もなすようになりました。

学会も多くなりさんかするだけでも大変なことですが、今回は30越す演題が集まりました。これも各施設に於て手術症例の中に、老人の占める割合が多くなり、老人麻酔に対する関心が高くなってきたためであろうと思います。

老人は成人とは異なり老化に伴う生体各部の変化があり、これに合併症を随伴している割合も高くなります。この両者への配慮が麻酔科医にとっても大いに要求される点であります。今回の発表演題のなかでも、麻酔そのものではなく、患者管理の面にも目を向けた発表が、多くみられるのは、手術期を管理する麻酔科医として自然の流れでありましょう。

今回は特別講演を東京大学教授の豊岡照彦先生と長寿医療研究センター長の木谷健一先生にお願いしました。豊岡教授には循環器病学の進歩を紹介していただき、殊にに心臓のCa代謝を中心に心機能のトピックを講演していただけることになっています。木谷所長は肝臓での薬物代謝に及ぼす加齢の影響について講演していただくことになっています。麻酔科医にとって医学の各専門分野での進歩をトップレベルの学者から聴き、これを日常の臨床につなぐことができれば非常に有り難いことだと思っています。お二人の講演は参加者にとって有益なものになるでしょう。

僅か一日だけの研究会でありますが、参加された先生方にとって実り多い一日となりますことを祈念しましてごあいさつとさせていただきます。

第8回老年麻酔研究会

会長　岡田和夫

御挨拶

第9回日本老年麻酔学会の開催にあたり御挨拶を述べさせていただきます。高齢化時代を迎え、老人人口も全人口の15％を占めるようになってきました。生体の各臓器の機能も年齢にしたがって低下し、老人は色々の疾病にかかりやすくなります。したがって罹患率の増加に伴い、手術、麻酔の占める割合も健康な世代に比較して多くなります。

老人の手術、麻酔の症例が今後増加の傾向が予測される以上、本学会の存在の意義が麻酔学の分野のみならず、広い医学の領域において認識され重要視されることは明かであります。このようなときに今回から本会が学会の形式に格上げしたことは、まさに良いタイミングと思います。

現在麻酔関係に限ってもかなりの数の学会があり、経済的に学会の運営自体にもきびしさが感じられます。学会費、学会参加費、また学会参加の時間的余裕の面からも、会員にとって大きな負担になっているのが現状です。数多くの会員に方々の参加のために、会費、参加費もできる限り抑えて、同時に学会の内容をより充実し、短時間で学術的・科学的なものにしなければなりません。

今回から学会に組織を移行し、全国レベルに広げていく意向から、演題の全国公募を初めて試みました。一般演題はまだ宣伝が浸透せず、歴史が浅いためか20題余りでしたが、内容的には優れた演題ばかり集まりました。これからは老人人口の増加と高齢化社会の拡大に遅れないように、21世紀に向けて本学会の一層の発展を期待し、また努力しなければなりません。

今回は特別講演を、厚生省老人保健福祉局課長の松谷有希雄先生と、慶應義塾大学医学部老人内科講師の広瀬信義先生にお願いいたしました。松原先生は厚生行政の面から老人医療の現況と将来について、広瀬先生は100歳を越えた老人の基準値の面から最近のトピックスをご紹介していただくことになっており、我々の日常の老年者の麻酔診療にあたって有意義なお話になると思います。

当日は2会場を利用したわずか半日の学会でありますが、会員にとって実り有る有益な学会になることを祈って、御挨拶とさせていただきます。

平成8年12月

第9回日本老年麻酔学会
会長　　福島　和昭

御挨拶

第10回日本老年麻酔学会総会
会長　花岡一雄
東京大学医学部麻酔学教室
東京都文京区本郷7－3－1

第10回日本老年麻酔学会の開催にあたりまして御挨拶を述べさせていただきます。我国における老年者の人口増加と高齢者社会の拡大に伴いますます老年者の手術機会が増してきました。御承知のように老年者は生体変化による合併症を少なからず有しており、若年者に比較してその麻酔管理上の問題点が多いことは明白であります。しかしながら、実際に麻酔管理を行う際に出くわす問題は千差万別であり、決して画一的なものではありません。本学会ではそのような問題を様々な角度から検討し、その対処法についてある程度の見解がみつけられればよいと思っております。

そのような観点から老年麻酔学会の重要性が認識され、前回において研究会から学会に組織が移行され、かつ全国的レベルに拡大されていくことになりました。そのため評議員も全国からお願いすることになりました。現在までに本学会で指導的立場で活躍されてこられました先生方が中心となられており、今後の21世紀に向けての発展が多いに楽しみとなりました。

また多くの若い先生方が参加しやすいように会場も東大山上会館を使用し、会場費（2000円）も極力低く抑えました。

特別講演と致しましては、基礎の方から、昭和大学医学部客員教授佐藤昭夫先生に生理機能の老化についてお願いしてあります。また臨床の方から、東京大学医学部老年病学教授大内尉義先生に老年者への臨床的なアプローチについて基本的な考え方について述べて戴くことになっております。日常の老年者麻酔管理において有意義なものになると思います。

シンポジウムでは高齢者麻酔の現状と問題点を取り上げております。帝京大学医学部麻酔科学教室稲田英一先生の御司会で、高齢者麻酔で出くわすことの多い心臓血管外科手術の麻酔、悪性腫瘍手術の麻酔、緊急手術の麻酔、整形外科手術の麻酔を中心に討議して戴きます。

一般演題は14題とりあげました。内容的に臨床研究、統計、症例報告と別れており、バラエティに富んだ興味あるものとなっております。

僅か一日だけの学会ではございますが、実りの多い有意義な学会となることを祈りまして、御挨拶とさせて戴きます。

ご挨拶

平成元年に発足した本会は当初，研究会として東京地区だけの人たちの集まりとしてすすめられてきたが，第8回の岡田 和夫教授のときから学会と名称を改めるとともに全国規模に拡大することを意図した。今回，浜松で本会を開催させていただくことになり開催地が初めて東京地区を離れることになった。

この会をお引き受けする前に，小生としては教授としての現役を離れているとして強くお断りしたのである。しかし，浅山 健前事務局長と花岡 一雄現事務局長から，本会は本来の「老年麻酔」自体を研究する目的以外に，高年麻酔科医の生き方について話し合うことも意図している，と言われたので我が身に照らしてお引き受けせざるをえなかった。そのような経緯から今回のプログラムにその意図を盛り込み「鼎談」として第一線の現役を離れてからも老人力を発揮してそれぞれ独自の生き方をされている四氏にご経験をふまえたお話を伺うことにした。我が国の麻酔科医の平均年齢は最近ことに高齢化しつつあるし，また，麻酔科の人的不足の現状に照らしても，第一線を離れてなおかつ余力を残している麻酔科医のあり方について焦点を当てることは大いに意義のあることと考える。

さて，この10年で手術患者は高齢化の一途をたどり以前では考えられなかった高齢者に大侵襲，長時間手術が再々行われるようになった。従って，ますます老年麻酔について正しい知識，情報，技術が要求されるようになっている。現況はどうであろうか？例えば高齢者に麻酔薬を静脈内に投与する場合，薬理力学の見地から少量でよいとしても基準をどのようにすべきかについては各人の経験にまかされている。それより以前に薬物動態学的にはデータの蓄積すらほとんどされていないのが現状である。老年麻酔学会としての役割は今後大いに認識されるところであろう。

プログラムにあるように今回，特別講演として国内から名古屋大学の間野 忠明教授，海外からニューヨークの渋谷 欣一教授，米国老年麻酔学会の重鎮であるテキサスのCharles H. McLeskey 教授，カナダトロント大学の新進気鋭のFrances Chung 教授をお招きした。シンポジウムとして今回は各論的な問題を老年麻酔では我が国の第一人者である東京都老人医療センターの目黒 和子先生にプランニングと司会をお願いした。以上の方々から最新の情報が得られるものと期待している。

一般演題として23題をとりあげた。内容としては循環，呼吸，自律神経，脳波解析，薬物動態，プロポフォール，局所麻酔，さらに症例など多岐にわたっている。今回，特別企画として一般演題を対象とした第11回日本老年麻酔学会学術賞を設けている。閉会時に受賞者を発表し表彰する予定である。

春まだ浅い2月末の1日だけの学会であるが，参加された方々には十分に満足していただけるように努力をいたす所存である。

ご支援いただいた浜松医科大学の佐藤 重仁教授，土井 松幸講師，その他の教室員の方々にここに深くお礼を申し上げる次第である。

第11回日本老年麻酔学会
会長　池田 和之

ご 挨 拶

第12回日本老年麻酔学会を和歌山県立医科大学麻酔科がお世話させていただくことになりました。和歌山県立医科大学および附属病院は、今年の5月に現在の和歌山市紀三井寺に移転してまいりました。会場はその一角に位置し、風光明媚な和歌浦湾が一望にでき、生涯研修・地域医療センターという名称も今回の学会にぴったりの会場と考えています。移転後初の全国学会ということで、主宰教室員一同をあげてこれまで準備をしてまいりました。

平成元年に発足した本会は当初、研究会として東京地区だけの集まりとしてすすめられてきましたが、岡田和夫先生が会長をつとめられた第8回より学会と名称を改めるとともに全国規模に拡大することを意図されました。前回の浜松で初めて東京地区を離れることとなった本会は、今回、初めて関西地区で開催されることとなり、ますます、全国規模に拡大することが期待されます。

近年、医療技術、とりわけ麻酔技術の進歩にともない、高齢者においても、以前では考えられなかったほど大きな侵襲で、長時間におよぶ手術症例の増加がみられています。それに従い、手術室における麻酔業務に従事するわれわれ麻酔医にとって、加齢がおよぼす生理的な影響および病態生理におよぼす影響に関する知識、さらに加齢にともなう変化に対応できる麻酔技術の修得がますます重要となってまいりました。また、これら知識、および技術に関する情報交換の必要性もおおいに注目されてきています。高齢者の麻酔に関する、知識、技術の修得、およびそれらの情報交換の場としての当学会の担う役割は今後さらに大きくなると考えています。

以上のような背景を踏まえて、第12回日本老年麻酔学会のコンセプトを「加齢にともなう病態生理に関する知識の修得と情報交換」として、今回の特別講演には和歌山県立医科大学第一内科教授、南條輝志男先生に、活物究理「臨床における分子糖尿病学」をお願いしております。南條先生は分子糖尿病学の第一人者で、遺伝子解析により判明したインスリン・ワカヤマの発見は代表的な業績として世界的に知られています。世界で初めて全身麻酔下で乳癌摘出術に成功したことで有名な、紀州の医聖・華岡青洲が好んで揮毫した「活物究理」（自然界の万物を注意深く観察し、それから得られる情報を活かし、真理を究明するの意）を今回のキャッチフレーズにされていますが、分子糖尿病学のような最先端の研究で細胞、遺伝子レベルで論じられている分野においても、華岡青洲の教えの如く、日常臨床での注意深い観察が重要であることを強調する講演となると思われます。一般演題に関しても、この活物究理の精神に則した、高齢者の麻酔研究の発展に寄与するような多くの演題発表および活発な討議を期待しています。また、自治医科大学麻酔学教室、平林由広先生のランチョンセミナー：「Central neuraxial blockと加齢」は加齢という側面から脊麻、硬麻を論じていただきますが、平林先生が実際の臨床の場で得られた貴重なデータに接することができ、われわれの知識を育む良い機会になるでしょう。

今回は和歌山で開催されることから、多くの先生方から、この機会だから、華岡青洲の墓参も企画して欲しいとのご希望があり、学会のプログラムもそれが可能なように進めてまいりました。この学会に出席頂く皆さまにとって、学問的な討議は言うに及ばず、2000年最初の学会として記念となることを願っております。

第12回日本老年麻酔学会
会長 畑 埜 義 雄

ご挨拶

第13回日本老年麻酔学会を高知医科大学麻酔科蘇生科、集中治療部、救急部でお世話させていただくことになりました。

平成元年に研究会として発足した本会は、開催場所も会員も東京地区に限局しておりましたが、第8回の岡田和夫先生の時に学会となり、第11回の浜松での学会で初めて東京地区を離れ、第12回の畑埜会長の時に関西に来ました。江戸を離れ遠江、紀州と徳川ゆかりの地から、とうとう土佐に来ることとなったのです。

前回の畑埜先生の時には、華岡青洲の墓参が企画され、午前中のプログラムとなりました。今回は、演題数20を出していただいたうえに理事会、評議員会にも37名の出席を予定していただきました。

京都大学東南アジア研究センターの松林公蔵先生をお招きし、「老化とエコロジー」の題目で特別講演をお願いしております。

また、12時過ぎには学会が終了するようにしましたので、どうぞ観光などされまして、自然と海産物なども堪能していただければと思います。

第13回日本老年麻酔学会
会長　真鍋 雅信

ごあいさつ

第14回日本老年麻酔学会
会長　高崎眞弓
（宮崎医科大学）

第14回日本老年麻酔学会を開催するにあたり一言ごあいさつ申しあげます。

本学会は、第10回まで東京で開催されていましたが、その後は東京を離れ、第13回は高知市で行われ、第14回は宮崎市に回ってきました。

かっては65歳以上の高齢者は特別扱いされ、麻酔も困難をきわめましたが、麻酔学の進歩によって今では高齢者でもさしたる困難もなく麻酔が行われるようになりました。そうして手術もどんどん行われています。昨今では「100歳の患者さんの麻酔は可能でしょうか」と術前コンサルテーションがあります。今や100歳を超えて初めて高齢者なのでしょうか。とはいっても、いろいろな合併疾患を有する患者さんは多く、麻酔も一筋縄では行きません。それでも、なんとかこなしているのは、術前評価や術中モニターが普及して、患者さんの情報を緻密にキャッチできるようになり、かつ新しい薬物や麻酔薬の開発によって微妙な調節が容易にできるようになったことによるでしょう。患者さんに合われた麻酔計画を立てて、それを実施できるようになったことでしょうか。このような麻酔の進歩に、本学会が多少なりとも貢献できれば幸いです。

今回は、心房性ナトリウム利尿ホルモンに続いて宮崎医科大学で発見され、目下脚光を浴びている“アドレノメデュリン”について、その発見者に直接講演をお願いしました。この微量活性物質が、老年麻酔にどれくらい関与するかわかりませんが、最近までの知見をまとめて拝聴できる良い機会と思います。

開催日が2002年2月2日と大変“語呂のいい日”になりましたが、多くの会員に集まっていただけることを願っています。

2002年1月

ごあいさつ

第15回日本老年麻酔学会を開催するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本学会の開催地は、第11回大会から東京を離れて西のほうへ移動していきましたが、今回は一転して北に向かい、平成15年1月25日に盛岡でお世話させていただくことになりました。

老年の定義はいまだはっきりしませんが、高齢者の麻酔件数が飛躍的に増加していることはまぎれもない事実であります。件数の増加とともに、麻酔・手術の内容もますます高度化しており、我々麻酔科医にとり老年麻酔は非常に重要な分野になりつつあります。過疎、県民の高齢化が深刻化している岩手の地で、会員の皆さまに老年麻酔の問題を討議していただくのも意義のあることと思っております。

今回は22題の一般演題のご応募をいただきました。この中から、老年患者の問題とともに老年麻酔科医の問題を取り上げた浅山先生の演題は、「私の提言」としてご発表いただくことになりました。また、特別講演は岩手医科大学脳神経外科の小川　彰先生に、脳神経外科手術　―高齢者の特殊性―と題して講演していただくことにしております。脳外科疾患の多い北東北でも岩手医大では特に数多くの脳外科疾患患者の治療が行われております。その経験をもとに老年層の脳外科手術の特殊性を語っていただきます。

１月の盛岡の寒さは相当に厳しいですが、例年は積雪もなく、カラリと晴れた青空の下、岩手山をはじめ、雪を抱いたまわりの山々の美しい景色を楽しむことができます。学会の後は、温泉、スキーなど、東北の自然を堪能していただければと思います。

平成14年12月

第15回日本老年麻酔学会
会長　盛　直久
（岩手医科大学）



ご挨拶

ようこそ冬の山陰へ。

医療受給者の高齢化がすすみ、手術対象患者もその例外ではありません。日本老年麻酔学会の果たすべき役割も益々重要になって参りました。

今回は「高齢者のQOL向上を目指して」というサブタイトルで学会を企画致しました。１日目夕刻から、高齢者の周術期管理に直結する話題を中心としたイブニングセミナーと会員懇親会を、２日目には一般演題と特別講演、ランチョンセミナーを予定致しました。

今回は、冬の山陰へのアクセスを考慮した結果、このような日程になり皆さま方には大変なご負担をお掛け致しますが、冬の山陰での学会開催の機会は多くありませんので、ぜひこの機会にご来米頂き、学会の合間には、山陰の旅情と冬の味覚を充分楽しんで頂きますようお願い致します。多数の会員の皆さまにご参加頂き、有意義な学会となりますことを期待しています。

第１６回日本老年麻酔学会

会長　石部　裕一

ご挨拶

わが国人口の高齢化はますます進み、今世紀中には世界各国が未だ経験したことのない超高齢社会になると予測されております。また、当然のことながら高齢者の有病率は極めて高く、2/3近くの高齢者が病院へ通院しているとの統計結果が厚生労働省から発表されております。このような情勢のもと、高齢者をめぐる保健・医療の問題が社会的に大きくとらえられ、国民が叡知を結集して対応すべき課題とされております。

最近の外科学の発展により、従来であれば適応をためらったであろう数多くの手術が、高齢者に施行されるようになってまいりました。しかしこの事実は、周術期管理に携わる麻酔科医の貢献なしに語ることはできません。と同時に、私ども麻酔科医は今後とも一層の研鑽を行い、高齢者とその家族が安心して手術を受けられる環境を整備していく必要があるものと考えております。

今回、日本の中でも人口の高齢化が著しい北陸におきまして、第17回日本老年麻酔学会を開催させていただくことは大きな喜びであります。本学術集会では、高齢者の周術期医療の中でも特に循環管理に焦点を当て、真摯な討論をしていただければと考え企画をいたしました。3月5日には、鹿児島大学医学部麻酔・蘇生学講座教授上村裕一先生、兵庫県立姫路循環器病院麻酔科部長中馬理一郎先生、秋田大学医学部麻酔・蘇生学講座助教授田中誠先生にお願いして、「高齢者の周術期循環管理」に関するイブニングセミナーを、翌6日には、金沢医科大学高齢医学科教授の森本茂人先生に、「老年者高血圧の病態と治療」と題した特別講演をお願いしております。また、日本全国から20題の素晴らしい演題を発表していただくことになりました。本当に有り難うございます。

最後になりますが、本学会開催に際しては、多くの病院、製薬会社、企業等のご支援をいただきました。この場をお借りして深く感謝の意を表したいと思います。皆様のご支援を無駄にすることなく、必ずや実り多い学術大会にしたいと考えております。

第17回日本老年麻酔学会会長
土田　英昭

ご 挨 拶

第 18 回日本老年麻酔学会を開催するにあたり一言ご挨拶申し上げます。

ようこそ早春の秋田へ。秋田弁で「えぐきたな」と申します。

昨年の「敬老の日」に、全国の 65 歳以上の高齢者が 2556 万人となり、初めて総人口の 2 割に達したことが報道されました。これは、他の欧米諸国と比べて最も高い水準で、10 年後には 26%に達する見込みとのことであります。

さて、一昨年の米子市、次いで昨年の金沢市と日本老年麻酔学会の開催地は日本海側を北上してまいりました。そして今回、全国でも最も高齢化が著しい秋田県にて第 18 回日本老年麻酔学会を開催させて頂きますこと、誠に光栄でありますとともに意義深いものがございます。

今回のテーマは「老年麻酔を再考する」とさせて頂き、高齢者の麻酔・医療に関する諸問題についての講演を予定しております。1 日目のセミナーにおきまして旭川医科大学救急部助教授の藤田智先生には「シミュレーション教育、老人麻酔への応用」、筑波学園病院救急診療部長の斎藤重行先生には「高齢者腎不全患者の麻酔管理」、島根大学医学部中央手術部助教授の佐倉伸一先生には「高齢者の硬膜外麻酔・脊髄くも膜下麻酔」についてのご講演を賜ります。また、2 日目には秋田大学医学部社会環境医学講座健康増進医学分野教授の本橋豊先生による特別講演「高齢者のうつにどう対処するか−地域のフィールド研究からの考察」を予定しております。

なお、近年になく多数の一般演題応募を頂き誠に有り難うございました。有意義な学会となりますことを祈念しております。また、学会の合間には秋田の風物、伝統文化ならびに味覚を堪能されますようお願い致します。

第 18 回日本老年麻酔学会
会長　西川　俊昭

― ご 挨 拶 ―

今回のメインテーマは「老年患者の周術期をトータルで考える」としました．近年，65歳以上の高齢者人口は総人口の２割に達し，高齢者手術も増加の一途をたどっています．このような状況の中で麻酔科医は，加齢による生理学的・薬理学的変化と麻酔の関係を充分に理解しておくことが必要と考えます．一方，麻酔科医が日常的に使用しているアメリカ麻酔学会（ASA）の身体状態分類や平成18年3月に厚生労働省から通知された「重症患者の定義」には「高齢」に関する項目はありません．したがって，実際の臨床現場では加齢による生体の変化を理解した上で，個々の患者の状態を充分考慮した総合的な管理が求められます．さらに，われわれ麻酔科医は単なる手術麻酔にとどまらず周術期を見据えた麻酔管理を心がけなければなりません．すなわち，手術侵襲から患者を守り，かつ術後の快適度・満足度を含めた管理が必要とされます．

本学会学術集会では，高齢者の周術期管理の課題や展望についての理解をより深める目的で，術前，術中，術後に分けて教育講演やシンポジウムを企画しました．とくに今回は老年医学をより広い視点で理解するために，「高齢者の入院と高次脳機能」に関して札幌医科大学の石合純夫教授（リハビリテーション医学）に，また「高齢者のとらえ方―老年医学的アプローチ」に関して東京大学の大内尉義教授（加齢医学）に講演をお願いしました．“老年”をご専門とされている麻酔科学領域以外の先生方の話をお聞きすることで，われわれ麻酔科医の老年患者に対する考え方にも一石を投じてくれるものと確信しております．また，一般演題は老年麻酔に関する日常でのご経験や問題点について積極的にディスカッションできるポスター形式としました．是非，活発にご討論いただき，本学術集会が実り多い会となることを心より期待しております．

本学術集会は，あえて「第58回札幌雪祭り」の期間中を選んでみました．ホテルや交通でご不便をおかけすることもあるかもしれませんが，厳しい寒さの中にも温かみのある冬の北海道を満喫していただければ幸いです．

第19回日本老年麻酔学会

会長　　並木　昭義

◆ ご挨拶 ◆

2008年１月26日(土)～27日(日) に栃木県那須郡ホテルエピナール那須において、第20回日本老年麻酔学会の開催を担当させて頂くことになりました。今回の学会のテーマは「―侵襲の少ない麻酔―きっちり効いて、すっきり醒める」としました。

厚生労働省によると平成18年の日本人の平均余命は男性79.00年、女性85.81年で女性は世界のトップ、男性は二位となりました。また、平成19年度版高齢社会白書によると、我が国の高齢化の現状は５人に１人が65歳以上（高齢化率20.8％）で、いわゆる「団塊の世代」が65歳に達する平成24（2012年）には、高齢者人口は3000万人を超え、さらに平成67年には国民の2.5人に１人が65歳以上（４人に１人が75歳以上）となる超高齢化社会になると推計されています。

このような高齢化社会を迎えた我が国では、高齢者が如何に健康な状態を維持するか、すなわち―健康寿命の延長―は大きな課題です。今後の高齢者に対する医療は、病気を治すための医療、すなわち治癒をめざす一辺倒の治療から、生活の質を重視した医療が重要になってきます。手術は言うまでもなく、くすりや検査や麻酔も高齢者にとっては時には大きな侵襲となります。つまり麻酔自体も侵襲を少なくして、いかに健康寿命を維持するのに寄与するかがこれからの老年麻酔のテーマの一つであると考えます。

特別講演として自治医科大学学長、日本医学会会長の高久史麿先生に「長寿社会へのアドバイス―活き活き長生き健康のススメ」として生活習慣を守ることの重要性を講演していただく予定です。また、医師であり作家として活躍しておられる久坂部羊氏には在宅医療の実践を通じて実感した老人医療から「寿命の大切さ＝天寿」について語っていただく予定です。

イブニングセミナーでは「高齢者とレミフェンタニル」、ランチョンセミナーでは「高齢者と肺血栓塞栓症」をテーマとして、日本での第一人者をお迎えして講演して頂く予定です。また、モーニングセミナーとして「NPPVによる呼吸管理の実際」というテーマで若手医師によるベテラン麻酔科医向けの講演を予定しております。もちろん、一般演題も広く公募します。

真冬の那須高原での開催ですが、ホテル内には露天風呂があり、またスキー場も近くあります。多くの先生方の参加を希望します。

第20回日本老年麻酔学会
会長　瀬　尾　憲　正
自治医科大学麻酔科学・集中治療医学講座教授

ご挨拶

この度、平成21年1月31日(土)～2月1日(日)に静岡県熱海市・熱海後楽園ホテルにおいて第21回日本老年麻酔学会の開催を担当させて頂くことになりました。

今回の学会のテーマは「高齢麻酔への提言」といたしました。

新しい麻酔薬は麻酔法に変化をもたらします。深部静脈血栓塞栓症の予防は、麻酔法にも影響を与えます。硬膜外併用麻酔が制限されると静脈麻酔薬や吸入麻酔薬の用量設定が、特に高齢者では厳密にならざるをえません。

今回は、日頃高齢者の麻酔を専門にされている先生方から高齢麻酔への提言をしていただきたいという思いでテーマを決めさせていただきました。

特別講演として、長野経済短期大学学長、元日本大学副総長の竹内一樹先生に「市場原理主義批判－世界経済と日本経済、そして医療」と題してお話ししていただき、不透明な現在の経済状況の中で、今後医療人としてどう対処していけばいいのかを学ばせていただきたいと思います。

モーニングセミナーでは「高齢者の疼痛域値」を、ランチョンセミナーでは「吸入麻酔薬の高齢者意識レベルの影響」をテーマとして、それぞれの分野で造詣の深い先生方に講演していただきます。

日本老年麻酔学会はめずらしく毎年冬に開催されています。これは学会の開催地は、地方色豊かで食べ物やお酒がおいしい場所で開催し、身も心も充実させて勉強しようということから決められました。

今回は熱海で開催することと致しました。充実した学会の後はゆっくりと温泉につかり、リフレッシュしていただけたらと思います。

第21回日本老年麻酔学会
会長　田上　惠
東邦大学医療センター佐倉病院 麻酔科

See You in Yokohama

1月23日(土)と24日(日)の両日、横浜市山下町にあります横浜シンポジアにおきまして第22回日本老年麻酔学会の学術集会を主催いたすに当たり、一言御挨拶申し上げます。1963年には年齢が百歳以上の人は我が国にたった153人しかいませんでしたが、2006年には28,000余人(うち85%は女性)にまで増加しています。従って、私達が百歳を越える患者の麻酔管理を担当するのは決して珍しい事ではありません。加齢に伴い身体と脳機能の両者は低下すると共に、術前合併症を伴う頻度が高くなるため、高齢者の麻酔を担当する場合には麻酔科医は成人とは異なる木目の細かい配慮を行っています。従って、本学会の存在価値は大きいと思われます。

第22回の学術集会では、高齢者には如何にして侵襲の少ない麻酔管理を施行し、そして術後疼痛を管理するかに焦点を当て、瀬尾教授と小川教授の両先生にシンポジウムをお願いしたところ、大変良い企画を立てて頂きました。明日からの臨床に役立つ報告と議論が行われる事と、期待しております。また麻酔科との関連が強い4企業から本学会の趣旨に添った講演を行いたいとのご依頼をいただきましたので、慶んでお受けいたしました。いずれの講演も興味深いテーマであります。一般演題も臨床及び基礎研究をあわせて20題を頂いております。海に面した快適なフロアーにて十分に御討議頂きたいと思います。

本学会は規模の小さな集まりであるためか、毎年会員間の意見交換がよく行われております。今回も一日目のプログラム終了後は、学会場の一階上にある東天紅において懇親会を行います。円卓を囲み中華料理に舌鼓を打ちながら情報交換を行って頂きたいと考えております。

本学会における発表および討論により、高齢者にも安全で侵襲の少ない術中管理と術後疼痛対策が発展する事を願ってやみません。

皆様方多数のご参加をお待ち致しております。

第22回日本老年麻酔学会

会長　安本　和正

第23回日本老年麻酔学会開催のご挨拶

大分大学医学部　麻酔科学教室　野口隆之

平成23年2月5日、6日に別府湾ロイヤルホテルで第23回日本老年麻酔学会学術集会を開催いたします。　これからの日本は本格的な少子高齢化、人口減少時代を迎えてまいりますが、1990年代から注目を浴びている加齢医学は専門領域を超えた広範な医学の分野で、加齢とホルモン、免疫、酸化ストレス、遺伝子発現などの基礎医学から臨床医学、予防医学までを含むほぼ全ての医学分野に関係しており、われわれ麻酔科医も高齢者の周術期管理に何を提供することが麻酔科学の社会貢献になるのか考えてゆく必要があります。

本学会は小規模な学会ながら20回以上継続しており、今後の活動の内容次第で加速する高齢化社会で重要な役割を果たすことができる学会になると考えています。

今回、特別講演を同志社大学生命科医科学部　アンチエイジングリサーチセンター米井嘉一教授に“麻酔科医の立場から見たアンチエイジングへの取り組み”というテーマでお願いいたしましたので、われわれ麻酔科医も加齢医学の分野でどのような活動ができるのか皆様と一緒に考えてみたいと思っております。

今回の学会を通じまして、私を含めた大分大学麻酔科学教室が日本全国の老年麻酔学会員の皆様とお話しする機会を得て、よい刺激を受けることができ、皆様と共に日本の老年麻酔の発展に貢献できるよう精進してゆきたいと考えております。

平成23年1月15日

会長　野口　隆之

【開催のご挨拶】

愛媛大学大学院医学系研究科生体機能管理学分野

長櫓 巧

この度、第24回の当学術集会を2月4日（土）、5日（日）松山で開催することになりました。会長として開催にあたり一言ご挨拶申し上げます。

我が国は、2011年9月1日現在、65才以上の人の人口が2980万人、80才以上が866万人になり、今後益々高齢化が進むと予測されております。生活環境、医療の進歩により高齢でも健康な人が多くなり、また、麻酔法、周術期管理の進歩・向上により、年齢で麻酔・手術の適応の是非を論ずることが少なくなってきております。しかし高齢者は、合併疾患を有する率が高く、また複数の疾患を合併している人も多く、術中・術後に合併症を起こすことがしばしばあります。

人格が、それまでの長い年月で形成されるように、身体は長い人生の間に形作られ、高齢になるほど、個体差が顕著になっており、高齢者では、その人の身体の状態、脳機能の状態に合った麻酔を施行する必要があります。

本学術集会では、“高齢者の麻酔を安全に”をメインテーマとして、高齢者の麻酔法と周術期管理を中心にした学術集会を予定しております。特別講演では広島大学の濱田泰伸先生に「高齢者における呼吸器疾患の特徴とその管理」と題してご講演頂きます。また、一般講演、ランチョンセミナー、イブニングセミナーを予定しております。一般演題の応募が少ないのではと心配しておりましたが、37演題集まりました。皆様のご協力に感謝致します。5日（日）には、会員の方にも有益な「認知症と幸せに暮らすために」と題する市民公開講座を予定しております。皆様には奮ってご参加をお願い致します。

会場は、松山の道後温泉の玄関にあります子規記念博物館、老舗温泉旅館の“ふなや”を予定しております。昼間は麻酔の勉強をして頂き、子規記念博物館で子規、伊予（松山）のことを知って頂き、朝夕は道後温泉で、心と体を温めて頂ければと思います。皆様のお出でをお待ちしております。

開催のご挨拶

第25回日本老年麻酔学会　会長
（医療法人雄心会函館新都市病院）
青　野　　允

第25回日本老年麻酔学会開催に当って一言ご挨拶を申し上げます。

最初に、真冬に北海道までおいで頂き、心より感謝いたしております。

さて、平成24年9月1日、敬老の日に、わが国の65歳以上の高齢者人口は3,074万人、比率にして24.1%となりました。かつ同年の特殊出生率が1.39であることを合わせ考えると、何らかの対策が奏功しない限り人口の縮小に加えて、高齢かつ核家族社会はまだまだ当分進行するはずで、当然麻酔科医もこの例にもれないことは明らかです。

本学会の演題募集要項に「老・老麻酔」のカテゴリーを加えましたが、幸か不幸か、相当する演題の応募はありませんでした。麻酔科医不足が叫ばれて久しい中、高齢麻酔科医が活躍しているはずで、今後の問題にすべきと考えます。

更に身近な例として、私が麻酔科医として勤務している当函館新都市病院では、
平成24年新規入院患者のうち65歳以上が全体の実に74%を占めており、大部分は慢性疾患の急性増悪の症例でありました。そのため急性期治療が終わっても、社会復帰が難しい症例が多数見られました。現代の日本の医療事情をそのまま表現しています。

今学会では第一に加齢・老化による生体の変化、これらの変化に対する薬物の作用について知り、「医療行為」の実行段階では高齢・核家族社会の中での「説明と同意」について法的に学び、細胞の生き延びるための粘り強い努力と智恵を学ぶことを目的としました。

以上の目的のために、特別文化講演と銘打って①公立はこだて未来大学　中垣　俊之教授に「細胞の智を探る」、ランチョンセミナーでは②札幌医科大学麻酔・蘇生学教室　山蔭　道明教授に「鎮痛を重視した麻酔管理：高齢者でのポイント」、イーヴニングセミナーでは③当医療法人雄心会函館新都市病院　脳神経内科　蔭山　博司科長に「認知症　800万人の医療システムを考える～果たして我々は姨捨を回避出来るのか？」を、最後に医療従事者公開講座として④慶応大学大学院　健康マネジメント研究科　前田　正一准教授に「判断能力のない患者とのインフォームド・コンセント・代諾者による同意と医師の裁量」としてご講演戴きます。

本学会の存在意義が今後ますます認識されることを切望しますと同時に、学会で“智”を得たのちには、冬の函館と食と遊とを十分御堪能下さることを希望いたします。

第 26 回日本老年麻酔学会開催にあたって

第 26 回日本老年麻酔学会の開催を担当させて頂くにあたり、ひとことご挨拶申し上げます。

本学会のメインテーマを「知識を活かす老年麻酔」にさせて頂きました。65 歳以上の高齢者は人口の 2 割程度ですが、その 2 割の高齢者が医療費の 50％を消費していることから、老年患者に対する麻酔のニーズは今後ますます増加すると予測されます。このため、老年患者に特有の病態や生理反応を正しく理解することは麻酔科医に課せられた使命でもあります。シンポジウム 1「老年患者の PK・PD」では代表的な麻酔薬の老年患者における PK・PD についての知識を整理することを目標に企画致しました。

特別講演は、藤田保健衛生大学医学部外科・緩和医療学講座の東口髙志教授に「いきいきと生き、幸せに逝く」と題した講演をお願いしました。老年担がん患者に適切な栄養管理を行い、少しでもいきいきと生きて行けるようサポートするためのノウハウが得られる講演になると考えます。招請講演は、厚生労働省の前健康局 がん対策・健康増進課長の宮嵜雅則先生にお願いしました。「我が国におけるがん対策の動向」について厚生労働省の方針を拝聴できると考えます。シンポジウム 2「オピオイド使用患者の周術期管理」では、近年増加してきているオピオイドを使用されている患者の周術期注意点を整理できると考えます。これら 3 つのセッションのキーワードは老年、がん、オピオイドで、これからの医療において避けては通れないキーワードです。この他、招待講演として、Scott Kelley 先生には老年麻酔後の予後改善につながるモニタリング戦略を、Andrea Kurz 先生には体温管理と麻酔の長期予後についての講演をお願いしました。

一般演題には 33 題の応募を頂きました。症例報告だけではなく前向き、後ろ向きの臨床研究が約 3 分の 1 を占め、学会として臨床研究を応援する意味でこれらの研究発表時には並列で他のプログラムの進行を行わないこととしました。

以上のような盛りだくさんのプログラムを企画したことにより、学術集会の終了時刻が日曜日の 14 時となってしまい、皆様にはご迷惑をおかけ致しますが、2 日間、活発なご議論を期待しております。本学会が大いに楽しみ勉強できる機会となりますことを祈念申し上げます。例年、本学会は温泉学会とも言われ温泉地での開催が多く、久しぶりの東京開催となりました。しかし、水道橋の地には東京ドームシティの地下から湧き出る天然温泉である小石川温泉 LaQua があります。割引チケットもご用意しておりますので、是非温泉もご堪能頂けましたら幸いです。

平成 26 年 1 月

第 26 回日本老年麻酔学会
会長　小板橋 俊哉

第27回日本老年麻酔学会開催にあたって

平成27年2月14日（土）、15日（日）の2日間、岩手県盛岡市にて第27回日本老年麻酔学会を開催させていただきます。

高齢者の麻酔では、術後早期回復のため侵襲の少ない麻酔管理や適切な術後痛対策が求められます。しかし近年、術後に下肢静脈血栓や肺塞栓の危険性が認識されたことで周術期に抗凝固薬の使用頻度が増えたことや心疾患・脳梗塞のある患者では術前から抗凝固療法を施行されていることが多く、硬膜外麻酔の施行にかなりの制限が加わっております。このため、術後鎮痛を他の方法で施行する機会が増加しました。

本学会では、最近急速な勢いで普及してきている超音波ガイド下末梢神経ブロックに焦点を当てたシンポジウムを企画しております。本法普及の理由としては、先述の硬膜外麻酔の制限に加え、重篤な疾患を合併している手術患者が増え、呼吸や循環に影響の少ない麻酔を行うために全身麻酔薬の投与量を減らし神経ブロックで鎮痛をおこなうことが考えられるようになってきたことも挙げられます。特に老年麻酔においては上記のいずれにも該当する場合が多く、超音波ガイド下末梢神経ブロックは麻酔科医にとって習得すべき重要なスキルであると考えられます。また、従来はランドマーク法で神経ブロックを行うことが多かったものが、超音波装置が高機能となり神経を高輝度・高解像度で描出できるようになったため、神経の場所や走行を確認しながらより安全に行なえ、成功率も高くなったことも本法が普及した大きな理由といえます。シンポジウムでは、上肢・下肢・胸部・腹部に分けて4名の演者から御発表頂きます。

その他、共催セミナーでは最近本邦でも開始された経カテーテル大動脈弁留置術（TAVI）に関する御講演と高齢者に多い脊椎疾患に関する御講演をお願いしております。この時期の盛岡は大変寒い上雪も多いですが、皆様には是非ご参加いただき、今後の診療や研究にお役立て頂ければ幸いでございます。

平成27年1月

第27回日本老年麻酔学会
会長　鈴木 健二

第28回日本老年麻酔学会開催にあたって

第28回日本老年麻酔学会を長野で開催させていただくことを、大変光栄に存じます。

さて、現在、日本では急速に高齢化が進んでいます。われわれ麻酔科医も、麻酔・ICU・疼痛管理を行う患者さんが急激に高齢化していることを日々実感しています。こうした高齢化は患者さんに特有の問題ではなく、医療人を含めたすべての職業人での高齢化が進んでおり、相対的に若い就業者が減少しています。このような時代に麻酔医療はどうあるべきなのでしょうか。

これまでの老年麻酔は、高齢患者に特有な生体機能や疾患など、高齢者の安全な麻酔のための技術論を中心に議論されてきたように感じます。しかし、日々遭遇する超高齢者の麻酔管理に際し、現在の医療の方向性が本当に正しいのか、疑問に思うことがあります。今後、麻酔医療を推進していくためには、高齢患者の身体的な側面だけではなく、高齢者が中心とならざるを得ない今後の医療における哲学—基本的な心構え—を持つことが必要なのではないでしょうか。そのためには経験豊富な麻酔科医の叡智が必要と考え、今回のテーマを「高齢化時代における(老年)麻酔科医の使命」とし、シンポジウムでは、大学などでの管理職を退職後、第2の人生として臨床の現場を選択され第一線でご活躍の先生方(青野允先生、岡元和文先生、小川節郎先生、瀬尾憲正先生、吉村望先生)にご発表いただきます。これまでの心境や、今後の医療に対する考え方を語っていただき、私たちが進むべき方向性についてご教示いただければと願っております。

また特別講演として、教育委員会の企画として佐藤敏信先生(日本医師会総合政策機構)にご講演いただき、高齢者医療に対する施策についてお聞きしたいと考えています。もう1つの特別講演として、能勢博先生(信州大学スポーツ医学)には健康を推進するための歩行法についてご講演いただき、会員皆様の健康管理にも益できればと思います。ランチョンセミナーとして横山正尚先生(高知大学医学部麻酔科)と駒津光久先生(信州大学糖尿病・内分泌代謝内科)に、老年麻酔に重要な周術期の認知症と高齢者の糖尿病・代謝の問題点について、それぞれご講演いただきます。一般演題33題は、各演題の発表時間が短くなりましたが、1カ所の会場で全会員にご聴講いただけるように致しました。活発なご討議を宜しくお願い申し上げます。

冬の信州は寒さが厳しく何かと不便な地ではございますが、その分、空気は澄んで清々しくもあります。不慣れで失礼の段も数多くあろうかと思いますが、教室員一同、精一杯努めさせていただきますので、会員の皆様のお越しを心よりお待ちしています。宜しくお願い致します。

平成28年1月

第28回日本老年麻酔学会
会長　川真田樹人

会長挨拶

第 29 回日本老年麻酔学会開催にあたって

第29回日本老年麻酔学会を三重県津市で開催させていただくことを大変光栄に存じます。

世界に類をみない超高齢社会に突入した日本において、年間 40 兆円を超す医療費のさらなる増加を止める処方箋は高齢者が健康で活動的に生きることではないでしょうか。ところが現実には高齢者の罹患率は増え、高齢者特有の虚弱性、筋力低下を抱えた方が増加しています。このような高齢者が手術を受ける場合、心機能の低下、麻酔薬への反応の違い、術後呼吸機能の回復の低下、術後誤嚥・譫妄・認知症の悪化などが問題となります。

ところで高齢者の虚弱性、筋力低下を予防する方法はないのでしょうか。人間が活動するためには各細胞を作る材料が十分補給されることとエネルギー源の補給が必要です。これらはすべて食べ物から得られますが、高齢者では必ずしも足りているとは言えません。

そこで今回は「栄養と老化」という観点からの話題を各先生の講演に盛り込んでいただくことといたしました。特別講演として、教育委員会の企画として名古屋大学老年科の葛谷雅文先生にはフレイル・サルコペニアの対策と栄養について、京都大学肝胆膵移植外科の海道利実先生には周術期栄養管理とサルコペニアについてご講演いただきます。またランチョンセミナーとして浜松医科大学の中島先生に高齢者の心機能、和歌山県立医科大学の川股先生には骨粗鬆症と痛み、鹿児島大学の上村先生には高齢者の筋弛緩の効果についてご講演していただきます。

高齢者に限らず健康で元気な身体は我々医師にも必要です。今回の学会が患者のみならず麻酔科医にも食について考えていただける機会となれば幸いです。

平成 29 年 1 月

第 29 回日本老年麻酔学会

会長　宮部雅幸

会長挨拶

第30回日本老年麻酔学会開催にあたって

第30回日本老年麻酔学会を讃岐琴平の地で開催させていただきますこと，大変光栄に存じます。今期学術集会のテーマは「超高齢社会における麻酔科医の役割」とさせていただきました。皆様ご承知のごとく，日本は，既に4人に1人が高齢者（≧65歳）であり，世界で初めて超高齢社会（高齢化率＞21%）に突入した，世界一の高齢大国です。本プログラム・抄録集の表紙絵に示される大波は，この未曾有の超高齢社会を象徴しています。われわれ麻酔科医の乗った小舟が超高齢社会という荒波に翻弄されています。われわれは一体これからどこに行き着くのかという困惑を表しています。金比羅様は航海の安全の守り神様です。われわれを正しくお導き，お助け下さることを金比羅様にお祈りいたしたいと存じます。

今期は第30回，また日本の超高齢社会突入（2007年）以来10年，という節目であり，会長にご指名いただいたものの，私自身も表紙絵のように大変な大波に戸惑いました。そんな混迷の中からですが，「超高齢社会における麻酔科医の役割」として2つのシンポジウムを考えました。1つめは高齢麻酔科医の役割について，小栗顕二先生，藤田喜久先生，出海章弘先生それぞれの事例報告を伺い，いずれは高齢者となり「リタイア」を考えねばならない後続者をお導きいただきたいと考えました。2つめですが，高齢患者の周術期管理では麻酔科医の働きのみを考えるだけでは不十分である，多職種連携が不可欠であるという視点から，本邦でこの分野に先進的に取り組んでこられた4施設からご発表いただき，お導きいただこうと考えました。特別講演も2つと考え，日本老年医学会の重鎮の先生にお願いいたしました。1つめは，高齢者とポリファーマシーについて秋下雅弘先生から，2つめは，認定医制度講演会を兼ねまして，高齢者のサルコペニアやフレイルについて荒井秀典先生から，ご講演をいただきます。いずれの問題も，高齢患者の麻酔周術期管理には不可欠で重要な視点と考えます。共催セミナーも2つご用意いたしました。 cadaver study について佐藤裕先生から，高齢者とデスフルランの問題について稲田英一先生から，ご講演をいただきます。一般演題こそ学術集会の要でありますが，今期は 50 題という多数のご応募を頂戴いたしました。紙上をかりまして，ご応募を頂きました先生方に厚く感謝を申しあげます。一般演題セッションにつきましては，時間の制約上，2会場とせざるを得ませんでしたが，興味深い研究や症例の報告がございますので，熱心なご討議をたまわりますようお願いいたします。

今期は学術集会終了後に2つのサテライトセミナーを併催いたします。「さぬき超音波ガイド下神経ブロックハンズオンセミナー」では，高齢麻酔科医および高齢患者のための神経ブロックを主眼におきたいと考えています。「専門医共通講習」（A：医療安全，B：感染対策，C：医療倫理）は，香川大学の学内講習会ですが，香川大学職員以外の先生方も受講可能な講習会として開催いたします。受講証明書の発行（日本専門医機構から「専門医共通講習」受講済みとしての認定）を希望される先生は，諸種の制約事項について十分ご理解をいただいた上で，ご受講いただきますようお願いいたします。

今回の学会は，サテライトセミナーを含めまして，教室員の全くの手作りでございます。不行き届きの点が多数発生するかとは思いますが，何卒ご容赦の程お願いいたします。讃岐の地は比較的温暖ですが，二月は寒うございます。主会場となります琴平町公会堂は国の登録有形文化財で，大変優美レトロな木造日本建築です。防寒対策もレトロ基準ですので，防寒具のご準備をお抜かりなくお願いいたします。琴平は金比羅様の門前町でレトロな雰囲気が濃厚です。温泉，酒蔵，うどんはもとより，希少糖スイーツ，オリーブハマチ，オリーブ牛，オリーブブタなど讃岐をご賞味ご堪能いただきますよう，教室員一同，皆様のお出でを心待ちにしております。

平成30年2月吉日

第30回日本老年麻酔学会会長
白神 豪太郎

会 長 挨 拶

「第31回日本老年麻酔学会の開催にあたって」

この度、伝統ある第31回日本老年麻酔学の会長を仰せつかりましたことは、光栄な事であり、会員の皆様に心より感謝申し上げます。

今回は2019年、２日(土曜)にがん研有明病院の吉田富三記念講堂を中心として、学会を開催させて頂きます。

会場となる当院は、国際展示場駅・ビックサイトの近くにございます。また懸案となっておりました2018年10月開業の豊洲市場にも近く、東京湾の臨海地区にございます。

今回のテーマは「超高齢者社会におけるがん医療の進歩と麻酔科医の役割―夢を語ろう」と致しました。現在の日本では超高齢化社会が到来し、２人に１人はがんの時代となりました。がん治療の三本柱(手術、放射線治療、薬物療法)の進歩も目覚ましいものがございますし、これに伴い麻酔科医の役割も大変注目されております。まず、この点にハイライトいたしました。そして麻酔科医への大きな役割に応えるために、健康な老年麻酔科医にその秘訣を伺いつつ、更に期待したいと存じます。

また、2019年は麻酔科専門医・指導医取得の方々の新制度による初めての更新の年でもありますので、幾つかの共催セミナーの他、専門医講習、リフレッシャーコースも予定させて頂いております。

会員の先生方のお知恵を拝借しつつ、楽しい会となるよう準備を進めていきたいと存じます。

学術集会終了後は、会員の情報交換の会として、「ワインの夕べ」をお楽しみいただくとともに、翌日・日曜日は、豊洲市場、大江戸温泉、浅草散策、箱根湯元での温泉ツアーなど企画しました。有明でお会いできますことを楽しみにしておりますので、ご協力の程、どうぞ宜しくお願い致します。

第31回　日本老年麻酔学会
会長　横　田　美　幸
(がん研究会有明病院副院長　麻酔科部長)

会長挨拶

「第32回日本老年麻酔学会の開催にあたって」

この度、第32回日本老年麻酔学会の会長を仰せつかりましたことは、誠に光栄に存じます。会員の皆様には心より感謝申し上げます。

今回は2020年2月8日（土）と9日（日）に倉敷市芸文館にて学会を開催させて頂きます。学会のテーマは、「チーム医療で高齢者の手術に備える －元通りの生活に戻るために－」としました。高齢者の手術後は、元通りの生活を送ることが難しくなる状況の中で、日本老年麻酔学会は「手術を受けた高齢者がより良い周術期を送れる」ことを目指して発足しております。術後回復の障害とともに認知機能低下や譫妄は、高齢者が術後に元通りの生活に戻ることを難しくします。高齢者が元通りの生活に戻るために、我々にできることを考える機会にしたいと思います。

まず麻酔科医が関わり始める術前に焦点を当て、術中･術後へどう繋げていくのか、周術期外来、術前栄養介入、術前リハビリテーションなどチーム医療で高齢者が手術に備える手助けをする既存の取り組みを学び、今後の可能性を考えたいと思います。

また本学会の「老年麻酔」という言葉には、「高齢者麻酔の究明」とともに「高齢麻酔科医から学ぶ場」という意味も含んでおります。今回も、定年の後も国内外でご活躍の森田潔先生と福家伸夫先生に、ご講演をお願いいたしました。参加の先生方に、これからの麻酔科医の役割を考えるきっかけにしていただけたらと考えております。

2日目昼には、2019年のノーベル生理学・医学賞を低酸素に関する研究で受賞されたラボで研究をされておられた関西医科大学の広田喜一先生に「酸素はいつも足りていない」というタイトルで講演をお願いすることができました。新しい酸素観と周術期医学との接点を広田先生の研究成果と関連させてお話しいただけます。さらに、日本アンガーマネージメント協会の川上陽子先生に「医療者のための感情コントロール法」という講演をお願いいたしました。とかく殺伐となりがちな急性期医療の現場においても、感情をコントロールすることでチーム医療や人間関係をスムーズにして、いきいきとした職場にする方法を考えたいと思います。

会場の倉敷市芸文館は、伝統的建造物群が保存されている倉敷美観地区に隣接しており、学会でしっかり学び、そして考えた後は、大原美術館での名画鑑賞や街歩きを楽しんでいただけます。瀬戸内の旬な魚や美味しい地酒なども、会員の皆様にきっと満足していただけると思います。

会員の先生方のお知恵を拝借しながら準備いたしました。倉敷で皆様にお会いできることを楽しみにいたしております。

第32回日本老年麻酔学会
会長　中塚 秀輝
川崎医科大学 麻酔･集中治療医学1教室

会長挨拶

第33回日本老年麻酔学会は、2021年2月20日（土）、21日（日）に太宰府市で開催予定でしたが、COVID-19の感染拡大により、同日完全Web開催とさせて頂きます。また、本大会の開催にあたり、昨年夏に開催予定でありました第41回日本循環制御医学会総会・学術集会も同時開催させて頂きますことをお許し下さいました理事の皆様、会員の皆様に感謝申し上げます。

老年麻酔学会の特色は、高齢者を対象とした麻酔医療がテーマであるだけでなく、ベテランの麻酔科医の先生方が現役で学術活動に参加・発表して下さり、私たちに多くのことを教授して頂けることでもあります。これからの麻酔科医の生き方のお手本とするとともに、直接お話を聞かせて頂き教えを乞うことができる学会です。現地開催でのFace to Faceの学術集会でこそ、このような老年麻酔学会の特色が生かせるとの信念で、直前まで現地開催の可能性を模索して参りました。しかしながら、現在の感染状況の中で医療者に課せられた使命はこれまで以上に大きくなっており、医療従事者の感染は極力避けなければなりません。国民に新たな生活様式を提案している中で、医学会も新たな形式を模索していく良い機会かと思います。

この学術集会のテーマは「老年麻酔と心」といたしました。これまで社会を支えてくれた高齢者が受ける手術医療に際し「心」を込めて麻酔を行うこと、そして高齢者が直面する「心不全」。これは2025年に到来するとされる「心不全パンデミック」を想定したものでしたが、何と予期しない別のパンデミックが先に訪れました。世界中が医療崩壊の危機、経済の危機に見舞われ、医療体制の変化だけでなく、生活様式の変化も余儀なくされています。しかし、私たち人類はこれまでの歴史の中で、危機的状況を克服し、新たな世界に順応する能力を獲得しながら生き延びてきました。この学術集会が、新たな医学・医療のあり方も含め、改めて私たち自身を見直すきっかけになれば幸いです。

両学会共通の特別講演として、「心不全」をテーマに最新の情報をご講演頂きます。日本老年麻酔学会に参加登録して頂ければ、第41回日本循環制御医学会総会・学術集会のプログラムも視聴可能です。是非この機会に異分野の学術集会も覗いてみてはいかがでしょうか。また、年号「令和」と縁の深い太宰府市での開催にちなみ、特別講演『元号「令和」と万葉集』を企画しました。Webではありますが、どうぞお楽しみ下さい。

皆様が、日本老年麻酔学会の学術集会を通して、前向きに未来の医療を考えることができ、社会貢献につながりますよう祈念いたします。

第33回日本老年麻酔学会
会長　山浦　健
九州大学大学院医学研究院 外科学講座麻酔・蘇生学分野　教授

会長挨拶

この度、歴史ある日本老年麻酔学会を和歌山で開催させていただくことになり、大変光栄に存じます。和歌山では、畑埜義雄先生が 2000 年に第 12 回学術大会を開催して以来 2 回目の開催となります。2022 年 2 月 11 日（金曜日）～12 日（土曜日）に和歌山県立情報交流センターBig U で開催させていただきます。学術集会テーマは“老年麻酔の挑戦”としました。

我が国は 2007 年に 65 歳以上の人口が 21%を超え、世界中のどの国も経験したことのない超高齢社会を突き進んでいます。率とともに平均寿命も上昇し男性は 80 歳を超え、女性は 90 歳に迫ろうとしています。改めて毎日の手術症例を振り返ると、患者の高齢化に驚かされます。周術期医療の進歩や手術の低侵襲化は、医学的な適応を拡大し超高齢者の手術を可能にしています。90 歳を超えても大動脈弁置換が可能です。一方で、超高齢者に対する積極的治療をどのように考えるか、終末期や死をどのように迎えるかも老年医療の大きな問題です。そこで、老年周術期医療について技術的な面と哲学な面から議論し、新たな老年麻酔の挑戦を発信できればと考えております。

学術集会会場は南紀白浜に隣接しております。南紀白浜では、万葉の時代から宮人に愛された白浜温泉、黒潮に作られた美しい景観、そして紀州の海の幸を楽しむことができます。知の巨人、南方熊楠が思索を巡らせた地でもあります。少し足を伸ばせば、和歌山が誇る世界遺産“熊野古道”を散策することもできます。2 月 11 日（金曜日）～12 日（土曜日）は老年麻酔について議論を深めるとともに和歌山の魅力もお楽しみいただけると幸いです。

現在のところ、現地開催を予定しております。しかしながら、新型コロナ感染流行状況によりましては、Hybrid 開催や Web 開催へ変更する事態になるかもしれません。どのような開催形態になっても、その形態の特徴を生かし、多くの方に参加していただき、老年麻酔の発展に寄与できる学術集会となるよう準備してまいります。

会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

2022 年 1 月吉日

第 34 回日本老年麻酔学会
会長　川股 知之
和歌山県立医科大学麻酔科学講座　教授

会 長 挨 拶

「第35回日本老年麻酔学会の開催にあたって」



第35回　日本老年麻酔学会
会長　鈴　木　孝　浩
（日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野）

この度、第35回日本老年麻酔学会を担当させていただきますこと、身に余る光栄に存じ、かつ伝統ある学会主催の重責に身の引き締まる思いであります。これまでは気楽に参加するばかりの学会でしたが、恥ずかしながら私にとりましては中心となって企画する初めての学会となります。日本老年麻酔学会の品格を汚さぬよう奮励する所存でございますので、ご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

学会会期は2023年３月３日(金)、４日(土)とし、東京の中心、駅直結でアクセスの良い御茶ノ水ソラシティーカンファレンスセンターで開催いたします。会員の皆様には安心してご参加いただけますよう、感染症防止対策を整えた上で、現地開催を目標に鋭意準備を進めております。

本学会のテーマを「老年麻酔Ｑ＆Ａ」とさせていただきました。日常臨床で高齢者麻酔において湧出する多くの疑問に関し、エキスパートに20分という短時間内に明快にご解説いただくことで、できるだけ多くの疑問を払拭していただこうという主旨であります。耳目を集められる内容になりますよう、吟味、一考いたしております。どうぞご期待ください。その他、一般演題、ランチョンセミナー、スイーツセミナー等を盛り込み、プログラムでは皆様を飽きさせない、take home message を数多く得られる学会になりますよう熱を込めて企画しております。 2023年３月３日(金)、４日(土)、現地で皆様にお目にかかれますことを祈念いたしております。会員の皆様におかれましては、ご参加のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

会 長 挨 拶



会長　坂　口　嘉　郎
佐賀大学医学部麻酔・蘇生学　教授

この度、第36回日本老年麻酔学会を2024年２月16日（金）・17 日（土）に佐賀市のアバンセで開催させていただきます。新型コロナウイルス感染症の沈静化を鑑み、現地開催のみで運営いたします。

人口の高齢化が進む中、本学会は高齢者に焦点を当てた麻酔科学、侵襲医学を討議する場として発展してきました。今回のテーマは「超高齢化社会における健康とは？」とし、高齢者に対する周術期医療を軸に、高齢者の健康維持増進、それを支える医療や社会のあり方を広く討議することを目指しています。本学会会員および老年麻酔に関心をお持ちの皆様にとって、より一層知識を深める機会にしていただければ幸いです。

学術プログラムでは認定医制度講演会１、教育セミナー５、スポンサードセミナー１、ランチョンセミナー１、スウィーツセミナー２を編成しました。一般演題は35演題の応募をいただきました。優秀演題として選んだ５演題の中から、当日の発表を得て最優秀演題を選出する予定です。演者の皆様には研究成果と、最新情報をご提供いただき、聴講の皆様と活発なご議論を展開していただければ幸いです。

学術集会終了後に、会員の情報交換会をJR佐賀駅高架下に新設された「SAGABAR」で行います。佐賀の酒と食を気楽に味わえるお店です。帰路の途中、時間の余裕がある方は是非、ご参加ください。

多くの会員の方に佐賀でお会いできますことを強く願っております。関係各位の皆様のご指導、ご支援を心よりお願い申し上げます。

ご挨拶



日本老年麻酔学会第 37 回学術集会大会長
獨協医科大学医学部麻酔科学講座
濱口眞輔

2025 年 2 月 14 日～15 日の 2 日間にわたり，栃木県日光市にて，大会長として日本老年麻酔学会第 37 回学術集会を開催させていただきます．伝統ある本会の会長を務めさせていただけること，ひとえに皆様方のお力添えの賜であります．心より御礼申し上げます．今会は開催テーマを「老年麻酔学を日光で議論する-高齢者に優しい麻酔とは-」とし，私より若い先生方（60 歳未満）は「老年麻酔を施行する側」として，私の同世代以上の先生方は「施行し施行される側」として，高齢者に優しい麻酔を考えさせていただきたく思います．開催は予算の関係上，現地開催のみとなりました．オンデマンド配信を期待して下さった方にはお詫び申し上げます．

今会は，稲葉久雄様（日光東照宮・宮司）から「世界遺産　日光東照宮」の題での特別講演を賜る予定です．また，招請講演では中西真先生（東京大学医科学研究所）から「慢性炎症を標的として加齢病態を改善する」と題したご講演を賜ります．本講演は福島和昭先生からのご依頼を元に企画させて頂きました．この場を借りて感謝申し上げます．さらに，本学心臓・血管内科/循環器内科の豊田茂先生に高齢患者における心電図モニター管理，がん研有明病院の寺嶋克幸先生に高齢患者に優しい区域麻酔に関する教育講演をお願いでき，青野允先生（函館新都市病院）のご経験に基づいた貴重なご講演も賜れることになりました．加えて，千葉大学の長谷川麻衣子先生から高齢患者の術中体温管理，和歌山県立医科大学の川股知之先生から日本版術後せん妄プラクティカルガイドに関する話題をお話しいただきます．一般演題は優秀演題候補 6 演題を含めて 21 題の貴重なご発表を頂いております．どのご発表も社会の高齢化と高齢患者に対する医療に関する貴重な内容で，いずれも本会員に裨益ある内容と確信しております．デバイスシンポジウムは，各学会で設置される「ホスピタリティールーム」のようなスタイルで医療機器の勉強をできる企画です．少人数のハンズオンが出来るように準備しております．

最後に，2 月 14 日（金）の評議員会終了後に，山口重樹先生の尽力で「Korea-Japan Joint Symposium」をさせていただくことができるようになりました（山口先生の外交・交渉能力，半端ないです！）．昨年から始まった日韓の老年麻酔学会の交流推進の一環となります．予算の関係上，会長招宴や懇親会の開催はかないませんでしたが，本シンポジウムではお食事（お弁当）を用意できますので，是非ともご参加ください．

このテーマを検討する場として，今回は栃木県日光市の日光東照宮社務所内の会議場「客殿」で開催準備をさせて頂きましたが，東照宮周辺は細く長い坂が多いので，お越しの先生方はお気を付けください．道も入り組んでいるため，日光駅―会場間のシャトルバスを用意したのでご利用ください．近年の栃木県の冬は朝晩冷え込むものの日中は暖かい傾向にあり，1 年前の同月は全く雪がありませんでした．とはいえ，天候をご確認の上お越しください．そして，会場の空調などにも細心の注意を払いましたが，不都合がございましたら何卒ご容赦ください．

本学の奥田泰久先生から，「記録ではなく「記憶」に残る学会にしよう」と提案され，東照宮での学会を計画しましたが，果たしてどうなるやら…　不安でいっぱいではありますが，「オール獨協」で臨んだこの学術集会，多数の先生方のご参加，活発なご討論や意見交換をお待ちしております．